

オモトオナリの物語

The Story of Omoto Onari

福 寛 美

要 旨

『琉球国由来記』の石垣島の条には聖山、於茂登岳の神の由来譚が書かれる。於茂登岳の神はオモト大アルジといい、神女オモトオナリに憑霊し、神の由来を語る。オモトオナリの兄で、神を信じないハツガネは、神に山や海の巨大な生物を見せるよう要求し、大猪や大鮫を殺して喰ってしまう。神をじかに見たがるハツガネとオモトオナリは於茂登岳の頂上で神に会い、驕ったハツガネに神は鞭をかける。ハツガネの身体には虱がつき、苦しんだハツガネはオモトオナリを殺害し、自分も死んで石と化す。オモトオナリの死骸は神によつて於茂登岳に取り上げられた。オモトオナリは、於茂登岳の名、オモトと琉球の生き神信仰、オナリ（姉妹）神のオナリの名を持つ神的女性であり、死後、於茂登岳と一体化した。オモトオナリと神、そしてハツガネの物語を目撃し、神を崇敬する聖域を創出したのがハツガネの弟のタマサラである。タマサラは、始原世界に聖域をつかった。聖域から世界が拡大する、という発想は『おもしろさうし』のおもろに存在する。この物語に若干の分析を加えた。

キーワード

『琉球国由来記』、於茂登岳、オモトオナリ、『おもしろさうし』、御許山

『琉球国由来記』

『琉球国由来記』とは琉球王国の地誌である。成立は一七一三（康熙五二）年で、内容は首里城での一年の公的な祭儀の概略、王府の統治組織に関わることに、事物の琉球における起源、首里城ほか王府の神女祭祀に関わる聖域や祭神のこと、国廟である崇元寺（ちゆうげんじ）や王家の墓の玉陵（たまむら）のこと、那覇の地名起源や聖域のこと、禪寺一四寺院の縁由、密教一寺院の縁由、沖繩島、周辺離島、宮古・八重山諸島の聖域と祭祀に関わることを記す。

聖域や祭祀についての記述は、ごく簡単なものから祭祀の対象である神がなぜこの聖域に祀られたかを細かく記すものまで様々である。ごく簡単な記述とは、たとえば巻二十一の次のようなものである。なお、由来記本文は琉球的な漢文である琉球漢文と片仮名からなっているが、本論では引用の際、片仮名を平仮名に直し、漢文の返り点を開いた。本文の引用は、『琉球国由来記』^①（外間守善・波照間永吉編著、角川書店、一九九七年）による。以下、同じ。

天川御嶽あまかわうたき 神名 天川はなさう

登野城村とのしぢ

御いべ名 あまいら本主あまいらほんぬし

此嶽、由来あい知らず

この記述の御嶽とは、琉球の聖域を意味する。御は才ではなくウとよみ、嶽はタケではなくタキとよむ。その理

由は琉球方言が三母音であり、o音がu音に、e音がi音に変化しているからである。この天川御嶽は石垣市登野城にあり、アーマーオンとも呼ばれ、現在も崇敬されている。また「御いべ」のいべとは、聖域の中でも最も神聖な場を意味する。かつての御嶽は、本土風の鳥居や社殿はなく、聖なる森そのもの場合が多かった。そしていべを示すのは聖石やシャコガイの貝殻など、ささやかな存在だったという。

この記述からよみ取れるのは、石垣島の登野城村には天川御嶽があり、その神名は「天川はなさう」、いべの名は「あまいら本主」で、この聖域の由来はわからない、ということである。なお、神名といべ名の関係は、必ずしも明らかではない。ラドウレスク氏は先学の「神名は御嶽の聖名。いべ名が御嶽の神の名」、「神名は御嶽自体のよび名。いべ名が御嶽の神の名」といった説を紹介し、説得力がある、と述べる。後述する名蔵村の御嶽の場合、神名は美称辞的なので、この天川御嶽の神名のはなさうも、美称語なのかもしれない。

本論で筆者が取り上げるのは、この天川御嶽の次に記される名蔵村の御嶽の由来である。この御嶽の由来として、聖山の標高五二六メートルの於茂登岳おもとの神について記す。この由来譚を、分析してみたい。

名蔵村の三つの御嶽

前掲の天川御嶽の由来に続き、名蔵村の三つの御嶽が示される。それに次いで、三つの御嶽の由来が長い文章で示される。まず、三つの御嶽について、本文は次のように記す。

名蔵御嶽 神名 照添照明し 名蔵村

御いべ四座の名 おもとあるじ

東花てよしはな なかおもとなかつたらい 袖たれ大あるじ

水瀬御嶽 神名 照添照明し 同村

御いべ名 水瀬大あるじ

白石御嶽 神名 照添照明し 同村

御いべ名 みものともそい

この三つの御嶽の神名は同じである。ラドウレスク氏は前掲論文で、三つの神名が同じなのは珍しいこと、これは記述の誤りだと考えられる、と述べる⁽⁴⁾。このラドウレスク氏の見解はもつともである。ただし筆者は、神名はおそらく「照り添え、照り明し」で、神が輝かしく照り映えた存在であることを示す、と考える。これは神名というより、美称辞的である。

そしていべ四座の「おもとあるじ」は於茂登岳の主を示す。「東花てよしはな」はおそらく「あがりはな・てよしはな」という対語であり、上る太陽を意味している、と考える。琉球の古歌謡集で一六二三年に最終編纂されたと考えられる『おもろさうし』のおもろ(神歌)には、日の出の太陽を「明けもどろの花」、「清らちよの花」など花にた

とえる用例がある。そして、てよしも美称語と考えられる。よしは良しかもしれない。

「なかおもとなかたらい」は「中おもと・中たらい」という対語で、於茂登岳の中ほどの神と、その美称語と考えられる。たらいは、足を意味するのかもしれない。

「袖たれ大あるじ」は袖垂れ大主、と考えられる。『おもろさうし』には袖垂れという語があり、袖がすつと垂れるように船が順調に航海することをたとえる場合がある。石垣島において、船の航海安全祈願はたびたびなされたはずである。名蔵村の神に航海安全を祈り、その神名が順調な航海を示す袖垂れである、ということは十分考えられる。

そして水瀬御嶽のいべ名は御嶽と同じ名称であり、水の神と考えられる。また、白石御嶽のいべ名は「見物鱸添い」と考えられる。見物みものは『おもろさうし』では見事な、立派なを示す美称語である。そして、鱸は船の船尾を示し、添いは『おもろさうし』では美称辞である。見物鱸添いで、見事な船尾、ひいては立派な船や船の神を意味する、と考えられる。

このように三つの御嶽で祭祀される神は、まず照り輝く神で、於茂登岳の神である。そして上る太陽、於茂登岳の中ほどの神、航海安全の神、水の神、船の神などを神名やいべ名にしている、と考えられる。於茂登岳は航海安全を祈願する聖山であり、航海する際の指標の山でもある。また於茂登岳は周辺集落の水源地でもある。そして東方から上る太陽は、琉球列島では古くから信仰の対象だった。

このようにセットになった三つの御嶽の由来はどのようになっているのだろうか。

三つの御嶽の由来

『琉球国由来記』はこの三つの御嶽の由来を記す。その記述を以下に翻案する。なおヲモトオナリはオモトオナリ、おもと大あるじはオモト大アルジと記す。また、人名も片仮名で記す。

三つの御嶽を立て始めた由来。昔、名蔵という所に、ハツガネ、タマサラというきょうだいがいた。妹はオモトオナリといった。ハツガネは邪な心が強く、大いに驕っていた。

折節、世の中を守護するオモト大アルジという神が、オモトオナリに乗りうつり、託宣を下した。

「姉妹の三神が大和から沖繩へ渡り、姉神は首里の弁の御嶽に住まい、妹神は久米島に渡り、それぞれ山に住んだが、二番目の姉神の住む山は妹神の住む山より劣り、「私が住む山ではない」と言つて八重山へ移り、おもと岳という高山に垂迹し、諸神の大あるじと仰がれた。石垣島を守護する神であり、世の中に示現し、教え導きたもう。」

ハツガネはもとより驕る者であり、これは偽りだと思ひ信じなかつた。「まことに神であるなら、神の奇跡で海や山に住む大きな生き物を私に見せよ」と怒つて言つた。

オモトオナリはそれを聞いて、「それならば、池たうという所へ行くべきだ」と言う。ハツガネがそこに行くのと長さ七尺ばかりの大猪が走り出た。ハツガネは少しも騒がず、打ち殺し、これを喰つた。

また、「海の大きな生き物を見たい」という。オモトオナリは、潮嶺という所へ行くように語った。ハツガネがまた急いで行ってみると、高さ十丈ばかりの大波が幾千万重なり寄せ上がっていた。その中より長さ十丈ほどの鯨が出てきたのをハツガネは喜び、これも打ち殺して喰った。

さて帰り、「もはや海山の大物は見られた。御神をうつつに拝み申そう」と望んだ。オモトオナリは返事に「御神をうつつに拝み申すことは、ゆめゆめあるまじきこと」と言ったら、ハツガネは「うつつに拝むことができない御神の由縁を申したのは、偽りだ」と言い、腹をたてた。オモトオナリは、「それならばうつつに拝ませよう」と於茂登岳の頂にハツガネを連れて上り、神の御座の中に召し出した。

御神はうつつに現れ、「なんじ、神を偽りと申して、神の教えを信仰せず、ここまで参ったから、現れた。さて、ハツガネに糠ぬかを喰わせ帰そう」とあつたところ、空から糠が降りかかると思えば、神の座の中はもとの山となり、神もたちまち影も形も見えなくなった。

さて、驕るハツガネも神の威光を恐れ、肝をつぶして帰った。すぐに身から虱しつみがたくさん出た。その虱に喰われて半死の状態になった。オナリは「自分のせいでさういう煩わしいことになった」と言った。ハツガネは腹を立て、オナリを刺し殺し、ついに自分も死んだ。ハツガネの死骸は名蔵野の石となって今もまだあるという。オナリの死骸は諸神が影向ようてうし、おもと嶽へお取り上げになった。

この時、弟のタマサラは神の奇跡を拝み、名蔵に拝礼する所を建て、諸人に崇敬させた。今までこの島の大御神の始めはこれである、と伝来する。

この物語には三人のきょうだいと於茂登岳の神が登場する。三人はハツガネ、タマサラ、オモトオナリで、ハツガネは驕っているが、胆力も食欲もある男、オモトオナリは於茂登岳の神に仕える神女、そしてタマサラはすべてを見届け、名蔵村に神を拜む聖域をたてる者、となっている。

神と人がいかに関わろうと、それを目撃し、神への尊崇を聖域という形で残したり、記録を残したりする者がいなくては、関わりは存在しなかったのと同じである。タマサラは、於茂登岳の神の靈威と亡きオモトオナリの死骸が神々によって於茂登岳に取り上げられる、という神秘的な様相を目撃し、御嶽を創設した。このタマサラの働きは大きなものがある。

以下、この話を分析してみたい。

於茂登岳の女神と神女のおもろ

於茂登岳の神は、オモト大アルジの託宣によると大和から沖縄に渡ってきた、という。長姉は首里の弁の御嶽の神、妹は久米島の山の神、そして真ん中の女神が於茂登岳の神となった、というのである。弁の御嶽は現在、弁ヶ嶽と呼ばれる。琉球王国時代、王府祭祀において重要視されていた聖域であり、王国の最高神女職、きこえのおきみ聞得大君の元型の一つである弁財天とも関わる。

『琉球国由来記』には、琉球王家とも縁のあった日本の僧、日秀上人が七日間、毎夜、弁ヶ嶽（弁ヶ嶽）の弁財天に参詣したいと欲したら、次の夜に弁財天が垂迹すいじやくし、石の上に立って日秀上人と対面し、その石が弁財天対面石とし

て波上護国寺の山門の外の路上にある、という記事がある。⁽⁶⁾

弁ヶ嶽は沖繩島南部では高所であり、航海の指標の山でもあったので、航海守護の女神、弁財天がおわずにふさわしい。弁財天は航海守護の日本の女神、宗像三女神のイチキシマヒメと同一視されることが多い。三姉妹の女神が大和から沖繩へ来た、という語りは宗像三女神のあり方が反映している可能性もある。そして姉妹の女神がそれぞれのまします山のあり方、具体的には高低をめぐり、心をざわめかす、という話は富士山と大室山の確執など、本州にも存在している。また、山の背比べの話も、本州に存在している。ただし、由来記の於茂登岳の神の語りにも日本の影響が及んでいたとしても、それを証明することはできない。

於茂登岳の神を祭祀していた神女が『おもしろさうし』のおもろに登場する用例がある。それは次の久米島おもろの巻、第十一に次のように記される。おもろの本文の引用は『おもしろさうし上・下』⁽⁷⁾による。／は改行箇所である。行頭の①～⑦は便宜的に付した。

第十一—五五八

- ① 一 おもと嶽たけのかきこ 司子つかこ／久米くみの島しま おわちへ／世直よなおしが おわちへ
- ② 又またきちやら嶽たけのかきこ 司子つかこ／成なさが前まへ おわちへ
- ③ 又また首里しゅり杜もり按あ司お襲おい／十百末ともしすへ 按あ司お襲おいす ちよわれ
- ④ 又また真ま玉たま杜もり按あ司お襲おい／十百末ともしすへ 按あ司お襲おいす
- ⑤ 又また八重山やへしま島しまぎやめむ／果はたら島しまぎやめむ／十百末ともしすへ 按あ司お襲おいす

- ⑥ 又与那国いなくにぎやめむ／波照間はてるまぎやめむ／十百末ともしひ／按司襲あにしおそいす
 ⑦ 又繩なわ 渡わたちへ／糸いと 渡わたちへ／十百末ともしひ／按司襲あにしおそいす ちよわれ

このおもろは、ほとんど平仮名で記されている。引用で当てられている漢字は、長年の研究成果による。按司襲あにしおそい（按司様、ここでは国王）がアンジオソイ、アヂオソイ、十百末（千年後まで、永遠）がトモ、スへ、トモ、スエとなる場合があるのは、歌唱の場で発音されたおもろを聞き取ってその時の発音に忠実に筆記したためと考えられる。そしてこのおもろは、①と②、③と④、⑤と⑥が対応している。⑦はおもろのしめくくりの部分である。

『おもろさうし』のおもろ全般に言えることだが、おもろ全文が記載されることは稀で、ほとんどのおもろが省略記載されている。ちなみにこのおもろを歌唱の場で謡われた形に復元してみると、次のようになる。

- ① 一おもと嶽司子／久米の島 おわちへ／世直しが おわちへ
 ② 又きちやら嶽司子／成さが前 おわちへ／世直しが おわちへ
 ③ 又首里杜按司襲い／十百末／按司襲いす ちよわれ
 ④ 又真玉杜按司襲い／十百末／按司襲いす ちよわれ
 ⑤ 又八重山島ぎやめむ／果たら島ぎやめむ／十百末／按司襲いす ちよわれ
 ⑥ 又与那国ぎやめむ／波照間ぎやめむ／十百末／按司襲いす ちよわれ
 ⑦ 又繩 渡ちへ／糸 渡ちへ／十百末／按司襲いす ちよわれ

①②ではまずおもと嶽・さちやら嶽（おもと嶽と同じ）の神女が久米島、父なるお方のもとにおわしますこと、世直し（世を立派にただす）のためおわしますことが示される。おもろ世界で琉球的な神霊を祭祀するのは、王府の高級神女達（大君、君）やノロ、そしてカミと称される神女職の女性の場合が多い。そのほかに、用例はそれほど多くないが、神女が司（つかさ）と称されることもある。王府祭祀における神女の祈りが司祈り、久高島の神女が司子、などの用例がある。なお『おもろさうし』の司と君やノロの使い分けの理由は定かではない。

そして、③④では首里杜・真玉杜（ともに王城内の聖域）の国王様は永遠に、国王様こそましませ、と治世の永遠性が祝福される。ついで、⑤⑥⑦では八重山島・果たら島（八重山諸島）まで、与那国島・波照間島までと、八重山諸島全域まで縄や糸を渡して（支配して）、国王様こそ永遠にましませ、と謡われる。おもろには「糸や縄を渡す」で、国王の支配の及ぶ範囲を示す場合がある。

このおもろが史実の断片を提示しているかどうか定かではないが、おもと嶽司子が久米島にまします、という詞句は『琉球国由来記』の於茂登岳の女神と久米島の女神が姉妹だった、という記述との関係を思わせる。

このおもろとほとんど同じ詞句を持つおもろが、第十一と同じく久米島おもろ群を集成する第二十一—一四一〇と一四四三に存在している。

また、おもと嶽の対語のさちやら嶽のおもろが第二十一—一四〇九にあり、次のようになっている。

第二十一—一四〇九

一久米の君南風や／前にかち 寄て来う／成さが 珍らしや

又妹君南風や／前にかち 寄て来う

又組む手 取て 見らよ／前にかち 寄て来う

又鳥多りぎや 欲しす／八重山島 おわちやれ

又国多りぎや 欲しす／きちやら嶽 おわちやれ

又仲地綾庭に／ゑんげらへ 有らまし

(大意) 久米島の妹なる君南風は、両手を取ってみよう、前の方に寄つてこい、父なるお方が立派であることよ、鳥、国(の支配権)が欲しいからこそ、八重山島、きちやら嶽におわしたのだ、仲地の美しい神庭に、ゑんげらへ(建物名)がある)

このおもろでは久米島の最高神女であり、戦いに霊能を發揮したとされる君南風と父なるお方がまず謡われてい
る。この父なるお方とは、五五八とその重複おもろの一四一〇にも登場する。この人物は国王の可能性がある。久
米島から鳥・国の支配権を欲する、とよめるおもろに石垣島の於茂登岳(きちやら嶽)が謡われることは、前掲のお
もろとあわせ、於茂登岳の女神と久米島の女神の関係を示唆しているのかもしれない。

ラドウレスク氏は前掲論文でもおもと嶽司子について、「八重山の代表者で、国王との接待を行うのは八重山の大阿
母だけであるので、大阿母のことだと思われる。しかし、八重山の大阿母にその呼び方があったということについ
てこのオモロ以外に裏付ける資料がない」としつつ、このおもと嶽司子を八重山の大阿母と推定している。⁽⁸⁾

おもろに登場する於茂登岳の名を帯びる神女は、祭祀においては於茂登岳の女神同様の存在として振舞ったと推
定される。石垣島から久米島へ、実際におもと嶽司子が赴いたかどうかは措く。ここでは久米島を舞台に八重山諸

島の支配権を欲するおもろが存在し、おもと嶽司子が重要な役割を果たしていたらしい、ということを確認しておく。

オモトオナリの霊能

オモトオナリのオナリとは、兄弟が姉妹をよぶ呼称である。琉球にはオナリ神信仰が存在する。これは、姉妹は兄弟に対して生まれながらに靈的に優位であり、兄弟を姉妹が靈的に守護する、という生き神信仰である。おなりは『おもろさうし』にも謡われ、姉妹である神女、王府の神女、久米島の神女、王の娘、蝶になって航海守護をするおなり神、などとして謡われている。用例の中では航海守護の場面が多い。このことは、海洋国家の琉球で、神靈の守護が最も望まれたのが航海の場面だったことを示す。

オモトオナリは石垣島の於茂登岳の名と、神であるオモト大アルジの名を分け持ち、生き神の名も持っている。この名称は、オモトオナリが現実の女性というより神的存在であることを示す。また、オモトオナリは兄がいるので、まさに姉妹神としてのオナリである。『琉球国由来記』の記事は、神女の霊能を伝える古い時期の記述であり、大変興味深い。以下、オモトオナリの霊能について述べる。

由来記には、オモトオナリに世の中を守護するオモト大アルジという神が乗りうつり、託宣した、とある。この記事はオモトオナリが憑霊したことを示す。神女職の女性がシャーマンのように憑霊や脱魂をするのか、ということについては、様々な議論があるが、本論では言及しない。オモト大アルジは前述したように、大和から沖繩、久

米島を経て石垣島の於茂登岳の神となった、と自らの来歴をオモトオナリの口を借りて託宣した。オモトオナリはみえざる神の媒介者なのである。

そして、オモトオナリは驕ったハツガネに山や海の巨大な生き物を見る場所を指示する。この指示は、オモトオナリからではなく、オモト大アルジから出ている、と考えるのが自然である。オモト大アルジは於茂登岳、そして石垣島の神なので、自然や動物のことを知り尽くしている。そのため、巨大な生き物も操ることができるのである。

ハツガネは巨大な生き物達を見ても納得せず、現実の神の姿を見たがる。オモトオナリはハツガネを連れて於茂登岳の頂に上り、神の座の中に神を召喚する。聖山の頂上は神霊が現れるのにふさわしい。オモト大アルジはハツガネに糠を喰わせて帰そう、と糠を降りかけたかと思えば、座の中はもとの山になった、と本文にある。このことは、山が神の出現とともに割れて開き、神の座となり、神が出現したことを示す。このような形で神と関わることができるオモトオナリは、強い霊能を持っている、と言うことができる。

ハツガネは虱に喰われて半死の状態となり、オモトオナリが彼の自業自得と指摘したら、オモトオナリを殺害してしまふ。その死骸は神々によって於茂登岳に取り上げられた。このことは、オモトオナリが死によって於茂登岳と一体化したことを意味する。

オモトオナリは、生前はオモト大アルジに仕える者だったが、死後は於茂登岳そのものとなった。石垣島の霊能高い最高神女でおなり神、憑霊する者、神を召喚する者、兄に殺害される者は、最後はオモト大アルジとも一体化したのではないか。このオモトオナリが今に伝わる八重山大阿母職の文献上の始原の存在であることも、指摘しておく。

ハツガネ

オモトオナリの物語のハツガネは、きわめてユニークな存在である。ハツガネのあり方を、以下で考えてみたい。ハツガネは驕った人物で、オモトオナリの語る神の託宣を信じない。そして海山の大きな生き物を見せよ、と神に要求する。そして、大きな猪に冷静に対応し、殺して喰ってしまう。猪は由来記では王府の御料理座の食材になることが語られる。また、石垣島の宮良村で作物を荒らす動物として、山猪の名がみえる。

猪の次は鮫である。由来記には、ハツガネが出会ったサメを鯖と書いている。これは、先島諸島（宮古・八重山諸島）でサメをサバと発音するからである。由来記の宮古諸島の条では、干瀬（干潮の時に現れる岩や洲）に置き去りにされた老人を鮫が助け、それに恩義を感じた老人の子孫は鮫を喰わない、という話がある。また、日本神話において、海の神の本体が鮫だったり、地上から海神国への乗り物が鮫だったりする。このように、時には人語を解する霊獣の側面もある鮫が幾重もの大波の中から現れると、ハツガネは打ち殺し、喰ってしまう。

これらのハツガネの行動には、神や神の託宣を伝える妹への敬意は微塵もみられない。その一方、ハツガネには神の送ってくる大きな生き物達を冷静に打ち殺す、という高い戦闘性が備わっている。しかし、このハツガネも、妹が山頂で召喚した神の威光に恐れをなす。

神は大きな生き物の次は、糠を喰え、とハツガネに糠を降らせる。穀物を精白した後に出る糠は、最も粗末な食べ物でもあり、言うまでもなく粉末状である。猪や鮫と正反対の糠を浴びた後、ハツガネの身体から虱がたくさん

出てくる。この風は、由来記の語りには言及されていないが、糠が化したものかもしれない。

驕り高ぶり、戦闘性の強かったハツガネは、最後は極小の生き物たちに苦しめられ、半死の状態になる。そしてハツガネはオモトオナリを殺し、自分も死に、死骸は名蔵野の石となり、石は今もある、と由来記に記される。ハツガネとオモトオナリの死骸のあり方は、際立った対照性を見せる。オモトオナリの死骸は神々によって於茂登岳に取り上げられる。オモトオナリの死骸は丁重に扱われて人々の目から隠されるのに対し、ハツガネの死骸は名蔵野の石として、惨めな姿をいつまでもさらすことになる。

ハツガネはその活躍によって神をじかに拝む、という常人には不可能な経験をする。そしてオモトオナリを殺害して彼女を別次元の世界に送り込む。名蔵野の石となったハツガネは、石垣島で神と人が直接に相対した時代の最後の人物であろう。

集落祭祀の元型

前述のように、ハツガネ、オモトオナリ、そしてオモト大アルジの巻き起こした神秘的事象を目撃し、御嶽を開いたのがタマサラである。人は大いなる神を聖域で崇敬すべきである、神と人との関わりと神の奇跡はこのようなものである、とタマサラは伝えたのである。このことは、タマサラが集落の祭祀の元型をつくったことを意味する。

琉球の史書、『中山世鑑』には、創世神であるアマミク（アマミキヨ）が沖縄島に次々と聖域をつくっていったことが語られる。琉球の始原世界には、まず聖域がつくられ、そこから世界が広がっていく、という発想があったよ

うである。

『おもしろさうし』のおもしろには、神格化された国王が首里城を造営する、というものがある。首里城内には神女祭祀の御嶽がたくさん存在している。王城は政治、経済、文化の中心であると同時に、琉球最大の聖地、という側面がある。それがよくわかるのが、次の二点のおもしろである。

第五―二一七

一首里 おわる てだこが／玉石垣なまいしがき げらへて／玉金たまごがね 持ち満もちへるぐすく
又ぐすく おわる てだこが／玉石垣なまいしがき げらへて

(首里城にまします国王様が、美しい石垣をつくって、美しい黄金が満ちていることよ)

第五―二一八

一首里杜しよりもり げらへて／げらへたる 清らやきよ／上下かみしもの世よ／揃そろゑる ぐすく
又真玉杜またまもり げらへて／げらへたる 清らやきよ

(首里城内の御嶽、首里杜、真玉杜を造営して、造営したこと的美感よ、國中の世を揃えるグスク)

二一七では神格化された国王であり、太陽神てだの子が、石垣を積み、黄金で輝くグスク、つまり首里城を造営する。そして、二一八では首里城内の重要な二つの聖域の造営が賛美され、首里城が國中を支配するグスクである

ことが謡われる。

首里城の石垣が積まれ、聖域（杜、御嶽に同じ）が造営され、琉球世界に国王の支配力が満ち、国中の世が揃う、というのがこれらの二点のおもろの趣旨である。

タマサラは名蔵村に拝礼の場所（聖域）をつくり、そこから名蔵村の世界が広がっていったのではないか。具体的には、人々が定住し、生業とそれに伴う祭祀が創設され、人々の生きるべき運命や階層が定められる、ということである。

勿論、名蔵村、そして石垣島の世界は琉球王国より狭い。しかし、始原の時、神や神的人物によって聖域やグスクがつくられ、そこから世界が広がっていく、という発想は前掲のおもろ、そして『中山世鑑』に存在している。由来記のオモトオナリやハツガネ、そしてタマサラの語りにも同じ型が存在している。

それでは、タマサラが御嶽をつくり、そこで祭祀がなされるようになり、人間の社会生活が始まるとどうなるか、ということも考えなければならない。普通の人間によって構成される社会とはどのようなものか、ということでもある。

オモトオナリは霊能が高く、神はその来歴を語るために憑霊した。そしてオモトオナリは神を現実世界に召喚することもできた。そして最後は神々によって於茂登岳に葬られ、聖山とその神と一体化した。また、ハツガネは極端な暴力で鳥の巨大な生物達を制圧し、最後は石になった。オモト大アルジは自らの来歴を示し、召喚によって人前にその姿を現し、神の威光を示した。そのような極端な霊能、極端な暴力、そして人体の石への変容、強力な神の顕現は、普通の人間の社会には存在しない。それらはいくまで過去の、神話的物語である。

タマサラはその話を伝えた。タマサラは神話的過去と、人間社会の現実的過去の橋渡しをする人物である。

オモトという名称

ラドウレスク氏は前掲論文で、於茂登岳について、先学が「於茂登嶽には大本てらすの神がおられる」、「鳥のときはじめの大本」と述べていることにふれる⁽¹⁰⁾。『沖繩古語大辞典』⁽¹¹⁾のオモトの項には「未詳語。「オボツ・カグラ」の「オボツ」で、他界のことか。対語「たくら」も「かぐら」のあやまりか」とある。

於茂登岳は沖繩で最も高い山なので、天界に近い。天上他界であるオボツ・カグラに近い於茂登岳がオモトという名称を持つことは、おもしろ世界の天上他界、オボツ・カグラのオボツと何らかの関わりがあることを示唆しているのかもしれない。

筆者はかつて他所において、沖繩県多良間村の水納島に鳥の墓の伝承があり、それが百合若伝説の一部であることを先学によって指摘した⁽¹²⁾。百合若伝説とは、幸若舞の「百合若大臣」が元になっており、蒙古襲来の時代、架空の英雄の百合若大臣が活躍する物語である。

鈴木寛之氏は先学によって水納島の百合若伝説を分析し、「百合若にまつわる「伝説」は日本各地に分布しているが、とりわけ分布の密度が濃いのは九州北部の福岡県、大分県を中心とする地域であり、説話の中にも鷹にまつわる奇瑞を説く宇佐八幡宮への信仰がうかがわれる」と述べ、百合若説話が元来は宇佐八幡宮の唱導文芸であり、「奄美・沖繩への伝播も、これとの関連が想定されている」と述べる⁽¹³⁾。

水納島を含む南西諸島には渡り鳥のサシバが飛来する。時を定め、多くのサシバが飛来し、百合若大臣の鷹の墓の周囲の木にとまる。この様子を、鳥の人々は鳥の墓参りと考えたのである。

百合若大臣の物語が宇佐八幡宮の唱導文芸である、ということは別の問題点も提起する。なぜなら、宇佐八幡宮の聖地は御許山おもとという名称を持っているからである。八幡神は言うまでもなく戦勝の霊能を持つ神であり、武人に篤く信仰されていた。そして、日本本土に戦乱が絶えなかった時代、倭寇とよばれる海商・海賊集団が東アジアの海に跋扈していたこともよく知られている。倭寇が奉斎するのは八幡神である。

南西諸島の島々もまた倭寇の拠点であり、石垣島も例外ではない。海の道を自在に行き来する人々と、宇佐八幡宮の唱導文芸を南西諸島に持ち込んだ人々は、同じ海路を通ったはずである。宇佐八幡宮の聖地、御許山と同名の於茂登岳の名称は、この地に倭寇が運んだ八幡信仰がもたらされた可能性を示唆する。しかし、その時代も、その信仰をもたらした人々のことも、わからない。

なお問宮厚司氏はおもろ世界の天上他界、オボツの語源をオモト14としている。問宮氏は大和古語におけるオモトの原義は「貴人のいる場所、御座所」の意で、それが「神の在所である天上にある聖域」の意に発展することは十分にありえよう、とする。そして、オモトからオボツへの音の変化の過程を、国語学的に細かくたどり、提示する。宇佐八幡宮の聖地の御許山と、御茂登岳のオモトの名称の一致について、文字を記さない時代のことを詮索しても意味はない。ここでは御茂登岳のオモトと、宇佐八幡宮の聖域のオモト山の名称が一致していることを指摘する。また、オモトからオボツへの音韻変化が国語学的に明らかになっていることも指摘しておく。

オモトオナリの物語

『琉球国由来記』のオモトオナリの物語は、石垣島の於茂登岳のふもとの名蔵村で、於茂登岳を神と仰ぐ人々が語った物語、と推察される。その物語がどのようなきざつで『琉球国由来記』に採択され文字化されたかは、わからない。後代の由来記のよみ手は、この物語の面白さを楽しむのみである。

オモトオナリは於茂登岳の神に仕える神女であり、オモト大アルジヤ於茂登岳と一体化した存在のようである。その物語には、様々な外来の要素がある。その、より深い探究は、筆者の今後の課題である。

小論では、オモトオナリの物語の荒唐無稽な様相を指摘し、いささかの分析を加えた。この物語が『琉球国由来記』にあることを幸いに思いつつ、論を閉じる。

注

- (1) 外間守善・波照間永吉編著『琉球国由来記』角川書店、一九九七年、四九〇頁。
- (2) ラドゥレスク アリーナ・アレクサンドラ「八重山の民俗と国家体制―ウムトゥ山の神の神話と聖地の変遷に焦点を当てて―」(『琉球大学学術リポジトリ』琉球大学、二〇一七年)三四～三五頁。<http://hdl.handle.net/20.500.12000/36685>
- (3) 『琉球国由来記』四九〇～四九二頁。
- (4) ラドゥレスク、前掲論文、三四～三五頁。
- (5) 『琉球国由来記』四九〇～四九二頁。

- (6) 『琉球国由来記』二一〇頁。
- (7) 外間守善校注『おもろさうし上・下』岩波書店、二〇〇〇年。
- (8) ラドゥレスク、前掲論文、五八頁。
- (9) 『琉球国由来記』四八四～四八六頁。
- (10) ラドゥレスク、前掲論文、四〇～四一頁。
- (11) 『沖縄古語大辞典』編集委員会編『沖縄古語大辞典』角川書店、一九九五年。
- (12) 福寛美『火山と竹の女神』七月社、二〇二一年、二〇〇～二〇五頁。
- (13) 鈴木寛之「多良間島の口頭伝承をめぐる若干の考察」(『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合研究』琉球大学、二〇〇〇年)、六八頁。<http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027>
- (14) 間宮厚司「ミルヤ、アマミヤ、オボツの語源」(『法政大学文学部紀要 第五〇号』法政大学文学部、二〇〇五年)、八七～九〇頁。